

音・音楽からのメディアリテラシー教育の試み

Case Studies ; An Acoustic Approach to Media Literacy

兼古勝史(武蔵大学・立教大学)

Katsushi Kaneko(Musashi University, Rikkyo University)

キーワード

音楽科教育、メディアリテラシー、映画、テレビ、効果音

要旨

社会教育や学校教育において「メディアリテラシー教育」の必要性が叫ばれるようになって久しい。我が国では1990年代より、主としてマスメディア批判の文脈から、次いでPC、ICTの普及による情報教育の観点から、そしてメディアを活用した表現活動として、学校教育の総合的学習の時間や「情報」教育、「技術科」教育、あるいは「美術」や「国語」などの教科との関連で扱われ実践されてきた。しかしながら、「音楽」教科の中で「メディアリテラシー教育」が導入・実践された事例は未だ少ないといえよう。

本来、音楽や音あるいは沈黙といった音響的要素は、メディアの理解にとってもメディア表現にとっても映像と並ぶ極めて重要な領域であることを考えれば、音を主要な対象とする専門教科である「音楽科」が「メディアリテラシー教育」に対してひとり消極的、無関心でいるわけにはいかないだろう。むしろ「音楽科」はメディアの中の音・音楽の問題について、より積極的に責任を担うべきであり「メディアリテラシー教育」の現場において重要な役割を果たしていくことができるのではないかと考える。

一方「メディアリテラシー教育」の現場において、しばしば映像などの視覚情報が注目されるのに対して、「音」や「音楽」の問題は周辺領域としてあまり注目される機会が少ないという現状があ

る。「メディアリテラシー教育」全体の中で「音」の問題はなおざりにされてきた感がある。

こうした問題意識から、筆者はこれまで社会教育(市民講座・放送大学)、学校教育(小中学校・高等学校・大学)など様々な現場において「音のメディアリテラシー教育」に取り組み、音楽教育、メディア教育の双方にとって、「音楽科」が「メディアリテラシー教育」に参加することの意味と可能性について検討してきた。

これらの事例の考察を通して、「メディアリテラシー教育」への積極的な参加が、音楽教育にとっては、音楽の「聴く力」を一層深めるとともに、「音楽」と「環境音」(あるいは「楽音」と「非楽音」)の壁をしなやかに乗り越える契機となること、音楽への既存のアプローチとは異なる方法ながらも、音楽の偉大な表現の深みに子どもたちが触れる手法のひとつとなり得ること、そして、「音楽のデザイン領域」についての新たな認識の地平を切り開くものであることなどの点において、大きな可能性を持つものであることを確信している。

発表では、こうした実践事例の一部を紹介するとともに、音からのメディアリテラシー教育の題材として興味深い素材であり、子どもから大人まで世代を超えて視聴され続ける、わが国を代表するアニメーション映画『天空の城ラピュタ』(宮崎駿 監督、スタジオジブリ制作、1986)のオリジナル日本語版と北米版DVD(『CASTLE IN THE SKY』2003)の音楽・効果音の違いについて検討する。